



大内
興立
十杉傳
第二輯

卷四

於
202
4

13
202
4





欽定 十杉傳卷之九

第十七回 知縣姦計請賢士

仁八人の安宅有り。義父の正路あり。その安宅を曠乎して居らば。正路と兼て據さる。哀悲しきうふと聖人の遺いもの言の兼も以てある哉。當時八天下の英雄蜂の下。まが東国に八北條里見結城小田と始として千葉多賀谷浦上あど。その外名する勇将皆近国所々と猖狂し。人と殺して城を充屍と砍て山野小満まこ西国ゆや大内屋子大友菊地四国小長宗我部と主将をて。是が幕下に属する族その教奉て筆かて。かると名家の多くを仁政とめて其国家と治むる者ハ稀少して討戦と律どりの弱きと伐て并吞し。強きと怖して属従ふことハ

18
202
4

本幸馬二株

本幸馬二株

本幸馬二株

十四文

軍馬の止時なく。死ハ巨港の岸に満血ハ長城の窟に充て。百川さみから
 紅葉の影と浸すうと疑ひ。萬民塗炭の惱み堪むかる。乱世の時不
 居と上野の国片岡の郡。人見ノ原のうに傍石原とりハ所不構ハ救
 代連綿なる御士あり。その名と杉山主水と云ふ上武二国ハ最大なる田
 園と所持たり。秋收冬藏の期と過とを累世此処に住りのうら。茅
 宅次第に建連綿と表に々渺々なる惣堀と構へ瓦屋聖に埋て相に
 輝やた池水清うして夕陽斜に照るを庭にハ廣大の築山と築き西
 北にあつてハ妙義榛名の山岳と詠め東北にハ赤城の山上連累と
 して。森々る樹木眼と速る。敎舎の造り清らるゆして佳木名樹と植
 たり。赤壁峰々とて林麓あり。一里許程の泉水と湛え汀ハ鴻鴈

鷺鴦群集と。まて東に々碓氷川の流を屈曲ゆして水清く。濤々
 なる浪の音終夜に絶む。まて高寄安中の驛路近くとて曉かひ々
 冷の音嘶く野の足並歩みか。優に々送るのうら。主水ハその性
 温厚にして。まて弱官の昔より。只管書籍と好む。螢雪の功を積
 且ハ武邊に巧みとて勇氣あつて並ぶのあり。まて不幸にして
 両親と喪ひ。まて三十にも近づくるに。妻迎への莫是彼と嫌まる
 人ありとて。まて違つとを回答は。懇めて住るが元より仁慈
 の心深く。患難困窮のののまは財と惜まば。是と與ふ。難と救
 急と扶け。まてハ棺槨と調へ。是と恵む。其のハさくも富む。いど
 さらに驕まる莫はなく。飲食と菲して孝と鬼神に致し。衣服と

悪くして美と黻見ふ致さるるの往昔よりとて、慎み且まこ己が
所持るる。田園と耕さるるのみを、彼三代の達法たる井田こそ
至らね。その稅歛と薄うして、只管民と恵むるに、近邑近郷の人
人ハ主水が徳の厚き小感ト。情のむづよ屈伏して、父母の正く教ひ
尊む。さるる美名の世に、少くも。称讚せぬハ、なかりなり。かして、同国は、
の郡、鬼石とつるに陣營あり。代々の知縣が住所あるに、今ハ藤園
多胡平とて、武藏の国ハ賀美見王上野に、群馬吾妻片岡其樂
佐位那波新田築田の邊まで一口。あの多胡平が配下なれば、
貢稅よりして、罪科の軽重且牟論の得失まで、渠が裁断するさる
なり。さるる多胡平が人性いと兇暴、あて一点も、民と恵の心なく。

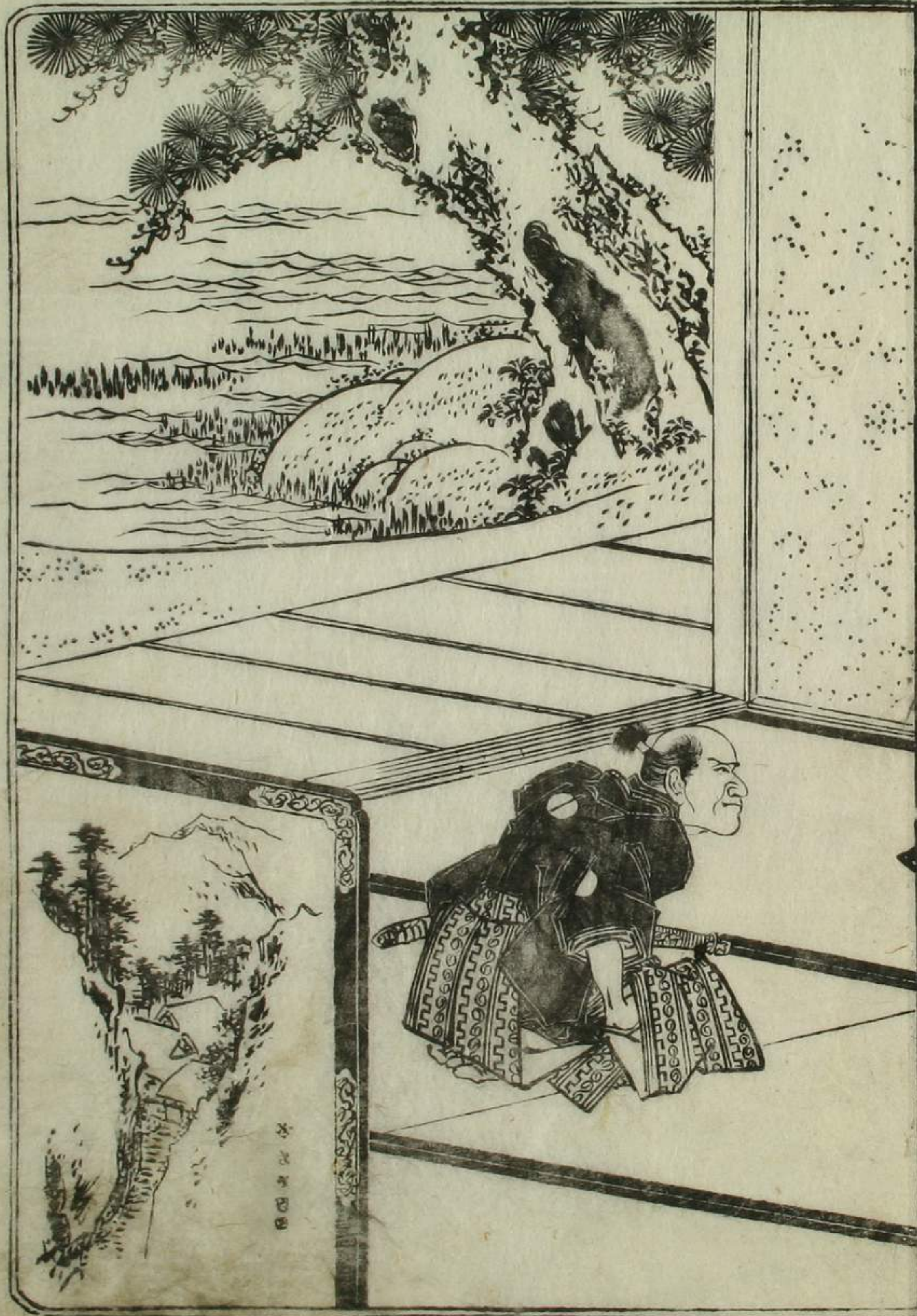
阿多諸らハ族とす、功あきま長となり。まの吾門よ、まの速
のよ、良民なりとも。その稅厚く課役とせりて、頗る塗炭の苦
まひうら世の人心ハ、往昔も、今も、変らぬりの、さるる推門に、
てその、似の威とま。長イ里老と人々に、敬まらるる、さるる老ハ金
銀珠玉と賄賂して、此多胡平に、諸らハ、さるる多胡平園ら、さるる海
くを、飲びて、賄賂の。多寡に、志とて、職と、接け、地境或ハ山野の
牟論、松への、さるる實否、さるる據ら、さるる金銀と、りて、送るる、老と、決断
して、勝と、定む。かりに、なれ、さるるの、依怙、あつと、恨むる、老も、多し、と、いふ
時の、威勢、詮方なく。推威に、怖とて、従、さるるの、さるる杉山、主水、さるる藤原、
邪智、暴戻と、さるる憎む、とり、さるる濁世の、做、さるる、さるる上、さるる誠、さるる主

君なく下に諫むる臣下るるを己がまふく挙動て不美の財と
集むるいとと皇將公家の官人あり如何ともまふくまふくにあつた
卵に入て卵は従ふかゝる知縣の配下とされるハる路々の不
徳より恨むべきふあらむとてその下知は従ひぬ救度用金の諫役
とてとて富る者には出さぬ貧しうてゆ難きはとて己より
弁用してその課役と巴累とどののうら多胡平とをて風小まて石原
杉山ハ救代彼処の卿士とて富るるのふあらむと毎度の課役
も遅滞なく貧乏のには己よりその配當と償ふハのとも優
き漢子なりとあハあまとも吾配下あて名にまへる者どもハ
此門ふまひりて吾安否ととい音物と送る渠のそはとるまあら

と。聊知縣と侮むる心意ういと後忘あるのまら公役遅滞をた
らハ敢て咎むるに所なく且々々々彼主水の弱官たりてまとのま
その容賢者よ似たりといハ唐宋以来の腐且儒者が拍搯と耳
むり物々として人に阿る諂ふるふあらむとて己より身見を
考ふるべし渠よははけく吾威を示し懐けおるハ大事にあつて
少く物物の要もたんと独沈吟し使者とめて主水并へ往しあ
たり主水の使者は對面してまらるる人と見ると問は使者ハいよく
懇懇と主人多胡平が口説にハ足下救多の田園とめり世々まの石
原ふ居住して配下の民と恵むら威勢知縣の下司と謂はべきもの
景勢なり。以あるまの毎度の課役と一刻の遅滞なく務むるまら

神妙ある。且一点の筆論をくつて耕を者ハ畔を譲り。乃自ら人ハ左へ避
 偏み足下が大徳あり。不肖あるども此所の知縣の職に任せらる。鬼
 石よ住工と久しうして足下が美名ハ雷鳴の響くごとく小使りのうらまご
 一回も拜謁せむ賢者とむつる道るをバ此方よりして推参し。拜
 謁せむくハ欲さるども職にありて配下たる。足下が家に來らん夏
 世の人口も後影あり。微弱愚昧なる某と捨るハ其の近きハ鞍馬と
 促がして。鬼石へ入りあつるバ僥倖殊に甚し。此度見よ言へとの命
 とうひく。到着せり。諾ひあつる。大幸あるんと礼正しく演々且バ主水を其
 処ハ蹲踞して。某度ハ野外の小人その詞の廣大ある。回答するはも
 恐と死とさるり。さるごとく知縣の嚴重なる命と背くハ其のあらねば。

先日階下へ伺公して尊顔と拜さる。是を以て所々の郷士等。館へ
 伺公あまよくハ粗美するののる。公意ふあらむ。推門に至るハ
 不礼ありとぞ亡父の遺言とら守り。寒暖涼濕の安否とさ
 伺ひまうさぬハ此の入り。召にむしてハ聊も遅滞とさきふあざれば
 明日と床に仕事あらんと依然とて演々且バ使者ハとを領掌し。鬼
 石とさして帰る。此の知縣へ報し。多胡平はくらくら。秋
 主水があらと待ふあり。かして主水ハ使者とめ。独製ある。知縣
 何等の夏あは。斯態ある詞とめ。吾と迎ふ心と知らむ。定
 定めて是ハ死をあらと。さるるとる。吾徳と頻り。小拳と敵バ
 一め。まこと救多ある。課役とあてん。計較ある。あは。既ハ近習の



杉山全水
 藤里か
 招く
 宅に

武士とめて招くものと往ざらば。是も礼と毀ふるものと次の日未明
に供人の僅五人を引連つ。平生よりも投簾服する古夏布と似ふ
纏ひ古袴を着て馬にうち乗る。鬼石へ至り門前ゆて馬より下り。従
者一個をおく門をり。多胡平豫て期く。是はまづ玄関の左右あり
定役の幕らちまづ。弓矢と篩を歩卒等々。陣笠被りて並居り。
主水ハヨリ人々。會釈するやち通る。さて玄関の白洲に踏
踏し。召ふ志して杉山主水。是れ何公仕りぬ。此れ知緊へ言上と
愿ひ侍らんと額着バ其処に並居り。武士等救十人むらくと敷
臺へいで来り。まみ泰しく一礼。主人多胡平豫てより。足下を
と待りのあり。いさく此方へ参りて。業内とせんと先よ主水

ハ膝行低頭して跡は従ぐらうち通る。書院とおやも所ある。威
儀と装ふ武士等左右に並び。肘ととり。行莊さるがう強大なれど。
武備あまりある主水るれば。少も是も恥らひ。まご會釈し
通りゆけ。間毎に勤番する。武士殆も星の下。或時ハ見ゆる
戈戟と連綿てあると守り。まご或とんハ弓に弦う。小昭み抱へ
鷲の羽の。征矢と帯る衛もあり。主水ハ心も是ぞと。知縣が猛
威と示さん。かぐ連綿といつめ。き武士と備つ。吾心と恐怖
す。計波あらん。非なる。耽る校者等威をりて人と赫とす。此
此此ふあ。寸罪あり。年でることと恐とんと心の裡に笑と忍び
さて哉間とらうち通る。清らある。夏言語と後と。廣と百疊

不餘り。金浪珠王と接めて床より信宗の一油とつけ。桐の冊
 湖の枝とつら。碼碯の鏡温みして真珠の砂濃きなり。将人鬼と
 離るる心地をせらる堂上へ誘ひて業内の老い會釈して退き去り。主水
 は独此処に居てその為体と何ひるる小堂上の美麗のつもさらりる金色
 の屏風時給の障子。草花山鳥と彩を画する。猶とりて是と張雲桐高
 麗と敷滿は。琴瑟の具と建ある。風月の草席と積雅なると論るに
 ののあり。庭中を縁の砂と敷或ハ水晶の飛石を居え。樹を植て風
 濤の音を殺し。石を積てハ煙障の色とぼる。池に生る蓮葉の紛々として
 花薫る。焼香する空焼もえるぬ心地は白ふあり。主水ハゆる容と
 して。吾家叔代相僥して物好ある世々の人が庭を廣大に造り做し。

茅舎るからもいと廣く。建連綿とまら今とへ。此は応中なる造る。
 必も鬼神に憎まさん。さんとして毀らん。自ら糸服兼食して。
 天の眞理と怖るに。と人二国一郡と成敗する。知縣ありとも奇麗
 莊敬善美を尽く。傳人笑ある大内裡も。於の上は術あらん異る。驕
 姿の在さるる。民と貪りて。此の歡はと極むる。嗟擾らつて。
 丸彈いて。要時黙然たりるとき。遙向ふの襖を用きて。立ゆると藤正
 多胡平輝々とき。身で莊ひ。金造りの刀を佩し。屑徒ひらる。近習
 小性も。そのくは美麗と。知縣が左右或ハ後へ。列と乱さ。並
 居たり。その時主水ハ頭首して。昨日の使者到来し。此館へ。泰上と。並
 几。推と。此不肖ある。甚く。厚に。詞を被る。夏家

の面目此の眞加恐るゆりゆと礼王く演々色バ多胡平寛尔よりふるち笑
て某知縣の職に任じ。此地と司とる夏多年あるおふ足下仁慈を行ふ
よく郡縣を鎮むる夏童までも幼いのを頼り足下子遇すくおのり
公より暇を死此るれば。おのり多引せり。此程暇あるふよめて。使者
と奉らせし方牙早そく来駕某も粗雀躍し堪ざるあり。ゆきく此方へ
亦らして。後々困滞するべし。とまこと一間ある所は羨ひ頼り小性筆持
ゆづ。酒散はさるがう珠語は盛称諾美味を尽す。く。歡待と大形る。は
主水は是を辞し。ゆきく。ゆきく。許さるる。盡教順めり。ゆきく。多胡平
襖の方とむた。あや麻九郎よくと招ふ。應と。應と。圓答敷居の外小
低頭も。多胡平主水をえむりて。是る雄子ハ関東が。浪人ある。よく

此処はありて。吾と只管侍むふより。此れと抱へて座右に侍ら。障ある
時ハ政更と語るに。ゆきく。ゆきく。新参ある者るれ。よく。吾
心と曉る。ゆきく。仕ある。ゆきく。召寄り。年倍も。足下は。等。詞。と
る。ゆきく。語り。ゆきく。麻九郎。此方へ。と。一間へ。ゆきく。盡
あど典。ゆきく。主水も。會釈。ゆきく。四方八表の雑話。ゆきく。稍時を
移。ゆきく。梶木麻九郎保土。谷。ゆきく。無実の罪を決め。ゆきく。秋人。ゆきく。せ
過。ゆきく。彼処と追放せ。ゆきく。此処。ゆきく。少。の傳と。ゆきく。此多胡平に隨
人。ゆきく。只管追従。ゆきく。薄。ゆきく。近習の列。ゆきく。多胡平主水
と。ゆきく。凡そ国郡と治む。ゆきく。聖の制度。ゆきく。あり。ゆきく。世
ハ。ゆきく。迂遠ある法。ゆきく。と。ゆきく。治め。ゆきく。此程も。ゆきく。麻

九郎とさ多く改定と善悪と論るども一定せむ足下ハいつある法
 として配下と伏と謂ふことゆるす。語り多しと小滕と勸む主水ハ少し
 うち笑のそ其愚家短ぢめて。争で法度と知り侍らん僥倖ふして世
 と思ね多く田園と所持るはくらそと耕して眷属と養ふ族も少る
 くらむ多年の恵とあまより。吾りハ所と背ぬあまべし人と懐くる徳
 あまべしと謙退して答ふふ多胡平頭とうち振てさるゆいれを衆
 人の好悪ハ當時人ありては思世の恵よりんや周室八百余年ハ
 して滅びるとあまべし。斯うら鮮て物ぐるに。どて心と隔はるや一左
 人の説話をゆるふ。凡ての民と扱ふに。至まで富むるをうにるべし。
 富むるハ農をよ怠る。こととて国家の恵とせむ。さりとては。窮むる

時ハ。離散して是もま。大なる患なり。富むる窮むるを。治るを。治
 りて正乃ち。あまべし。と。言。く。理。は。協。り。足。下。ハ。い。ふ。あ。ま。ひ。の。と。復。さ。り
 して。い。あ。う。く。謙。退。さ。る。も。あ。ま。べ。し。相。公。の。治。め。あ。ま。及。何。ぞ。非。と
 ろ。や。え。ん。や。あ。ま。い。あ。ま。い。と。も。天子將軍国司の。ど。た。貴。人。の。と。と。ま。う。た。ハ
 の。と。も。恐。こ。る。と。も。ま。が。吾。々。が。此。と。り。て。の。を。今。ハ。世。間。騒。が。く。唐。山。七
 雄。の。世。も。等。一。乱。臣。賊。子。多。く。は。法。国。の。受。領。と。始。と。仁。義。と
 行。ふ。心。を。只。也。臣。勇。猛。の。と。誇。り。民。と。虐。け。合。資。して。さ。ら。し。め
 飽。を。あ。ま。ら。ざる。由。豊。年。ま。た。り。殺。辛。苦。も。後。に。凶。年。に。ま。ま。こ。死。亡。と
 適。宜。と。も。ま。が。も。氣。健。な。職。と。守。り。春。ハ。耕。し。秋。收。む。殊。勝。の。を。ま
 は。ま。ま。唯。取。り。て。法。と。せ。む。と。取。る。と。り。て。法。と。せ。む。か。介。と。り。て

倣ふことゆゑに推々もよく多量なれど君の己をたよあり民の己
も下にあつてその罪をさへと君より命のあるに至るく民の患
と多量の強拒して得せらるん下遺りて必の安泰を
らんと願ふやあん民困窮して後終る国に孔々たるを
その直と強ていとも推うけて道理にまはるり世に考り
てよくその民と養育する必む大業にまはるり世に考り
よるゆゑの事ハ昔往の人ハ半にして功ハ必む倍せんと孟軻の言
はく此時のめりと回答より色ハ多胡平ハあの論もてる理も時と
あふりのくら唯々として主水が貞と守り居たり

第十八回 宥怒智勇全性命

高木ハ風ハ挫け人ハ秀るハ讎ハ沈むと以あるる。かくて知縣の
多胡平ハ主水が詞の理あまど吾もふに似もはるで只仁美の
直と演且バいと不真ふ々も現ハ當然なる一言よ。そを論ふべき
詞を。麻九郎とえめりて賢者ありと杉山とせふりて亦ある
るどありていと賢くもいひたり。汝もその昔ハ知縣ハ仕え。貢
税刑罰と司どり。今もこ己が左右よあれバ心と責て勉強せよ。人我
道理とが知るものくら行るハ其妙ハ至らぬあべ。杉山主とを當時の
英雄隨仁者ふありとて。まこと呵とらち笑ハ蓋と巡らして。さあへ
自のとりなる。麻九郎ハ始めより。主水が体と猜して。是尋常の事
よあらむ。渠とて知縣が備る。平生よ招きそおくる。知縣ハ忽

此彼を愛して吾輩落くるりぬべし。再回あらぬやうにすること。
良策ありめりと心巧き席の果ると待たざる。多胡平も十二分
の酔をみせしむる容をよみて主水ハ席を辞さるる。まこと近頃は
おぼろと會状ある。多胡平ハ酔ふるまはぬ。奥へりかして主水ハ曩
の下。席々とうち通り。礼正しくして辞しさり。己が家居へ帰るるが
はらう。今宵の趣きを考へるに多胡平ハ理を諫くして多徳の
敢て我漫の心もなぐ。邪智を少くえむ。彼罷木麻九郎ら。
新参るる近習とまじり。そのさるり。暴戻して且倭弁なる。僻者
る。親しく彼処へ往む。まじり。鬼神ハ敬して
とを遠ざく。古人の二つもある。ものと心の裡は思惟して。今日の礼

あと。一面往らるまじり。亦も往む。のとも諫遠は過らり。或
日書翰を齎らして。頰の喜を。咄よ。依ハ遲滞とまじり。お
むと汗馬を馳て至り。多胡平自ら對面し。麻九郎も備は侍り。
かくて多胡平言ひ。ハ公用繁き。その中。めて頰の來駕満足せり。
召寄らるハ餘の喜。此回軍用の為よ。て吾配下。上武の
二回へ五十万貫の課役と宛らる。據て次第と配當するに。足下。田
園八千余町。ハ五万貫の役らる。是より七日を限り。て取集めし
は。此喜。喜も。遊る。その罪。足下。此。歡
待らり。と。變る。威勢。高。演。終。衝。入
み。り。主水ハ。何。に。吾。持。る。田。園。へ。五。万。貫。を。取

課役といひの古来今往例とまらば如何に非道の長りとも何等の
咎ある久あらねど莫大ると眉と頻め律法詳ふ言上りて者怨の
沙汰を乞ふと多くも奥深くの言ひなき傳もあらず麻九
郎のそ彼処に居るに主水ハ礼と正しくして只今知縣の命むらう五万
貫ある民家の課役畏よりて六ゆで僕が所持するハ悪地森田の
場所の多し年々規定の貢ふまら耕と老も困窮して只管愁訴
終るる五万貫ある課役と死に居所に住まぬを離散やせま
存せざるなり。良も仁慈と垂ぬハ耕まぬの八九が一仕る者の禄と世々
ゆて昔の容とせまら後宥大度のハ沙汰あらば萬民歡喜雀躍
して知縣を仰ぎ奉まらん此度宜しく執成と被ふりてとのいふこと

麻九郎彼方とらちえりて更に向の回答もせむ主水ハ心よめ
から。渠聲にあらざる。吾特むとも回答とせぬハ這回の課役ハ
此麻九郎が言わする者なるべし。さもはらむる程まで理尽せし言の
葉とあらむ自らする所謂やあらば此校老ハ仇もろく怨もるれと如
何るれば吾と憎きて知縣に勧めかく所謂るは課役と死て苦ま
あむるハ何ぞぞ吾り父祖の責とせむを。獨立の者るるが渠と
即座に兩段と怒と晴し曾ハまに諸人の難とも救ふべしとせむ
と先祖の祀も終且も後者の舌頭も父母より賜りる金玉の此と
果さん直願りく心の上よ又とおゆる。忍ぶハ此処ぞとあふら
堪え麻九郎が杖を引て今のでまに標返す舌うち鳴り此方と見

かり冷幾ひ律調ふも調りぬも。そのまゝ足下ぐ胸ふあふぐ。且まこ吾
 ハ近習みく。夫等の直ふ抱ふらふ此ふもあつねやゆとも要なり。夫
 倫言ハ汗のぞ。あつね再び入直あつ。知察ハ死ふ命を稟令と傳ふる
 職するもの。ゆふ足下と儘ま欲くも依怙の計らひたるべき也。書籍を好
 めるうゝるれど。かたりの夏弁へま。馳もま舌よ及ぶと聖人も宣ひ死
 そとまこ足下ハ何とらこんる眼ニハ備へまど畢竟面の飾ふあまらや。
 嗟苦々しき白徒まると冷々笑へハ傷と校つたりの悔しさを堪へま主
 水ハ頭と擡げ。是ハ知察が近習みあある。和服よ似げると夏と宣ふ
 そもく聖人の宣ひゆる。馳も舌よ及ぶぬと這回の直ふ引當りか何き
 馳馬ハ速き下で舌の尖り及むと。喻へる言の葉をから。とを釈

氏とめて定規とすると。言せぬ敢て麻九郎が眼を怒らし衝と立て。
 嗟るさく足下もどた田夫野人の嗚呼の老と説活るまも耳ハ持
 も。静まれやんと声励ま。宣と蹴まぐ入るみぞ埃ハ主水が面上へ
 ゐるとかまハ今ハなや。堪えがうて服差の柄も碎くる斗りみ握る。赤
 被らんぞともし。如何みやらん膝麻耳て立直さるも悔いねバ。あつね
 けりめこあつねのま。進退さらけに詮方なり。其間ハ麻九郎ハなや襖と推
 開ハ早らも影と隠さるまど主水ハ眼ハ血と泣き。齒嚙とるまこ。こま
 吾不図膝痛まばハ再び舌と嚙さるまどと嗟朽惜や遺恨やと彼方
 と白眼てあつねも溢さる涙ハま葛原ららまハ膽ふ命とつ。忙然として
 居るなり。かたる処へ病老ま此終とま。馳来つ。粗その容ふと多る物うら。

只管主水と宥めつ。彼麻九郎と喚做さる。素性ひつある者なら
ねど知察のいふ愛ゆ。そまよ。濟りく吾々とも蔑ゆ。不礼とる。そ
そと彼とと咎む。時ハ諛言せらる。夏と恐る。疲の神と會釈下
除く。通す。着あ。れいと憎む。き。白徒なり。這回の課役も渠が計
ら。知察が怨の深くして黄金と貪り飽てる。性と曉て。追従
斯く。ゆとと言せらる。吾々。た。計ら。足下が配下の公使と半宥
怨の捌とさ。善も思。知察の制度。宥怒。夏。至。心
心ゆ。豫と。正直。仁義。行。と。潔。麻士。主水。心
と。信。言。忽地。怒。和。か。大度。詞
と。情。散。け。け。財。惜。平。年。民。窮。

且ハ兵火の災厄ありて只顧患難ひ。夏。井の水
さ。濁。水田。向。氷。早。割。
粒の米。實。日。糧。支。竭。如何。廣。大。
課役と死て苦。ゆ。や。時。難。易。不。仁。甚。了。
の。半。宥。怒。あ。下。僕。計。課。役。と。務。め。手
さんと彼人々等に謝。終。退。ゆ。血。と。起。膝。の。痛。ハ。頼。ま
愈。て。平。生。は。変。る。主。水。ハ。心。は。信。吾。ハ。血。氣。の。勇。早
不。神。明。佛。陀。の。冥。助。あ。や。世。た。父。母。の。親。計。ハ。痛。め。此。と。全。く。帰。忽。地。頭。と。廻。苦。提。寺。た

父母の墓碑の傍へ踞る。今日の一寸を生る人に言て懺悔
して夫より家へ歸りて。息のかく今日の麻九郎が會釈といひ傳
と憎むのから氣も結ぶ。曾て一間の裡に籠り居る。慰め兼く秋
の夜の月ハ隈なく照りたり。千種に集むる虫の音もさやうふゆるねど。
物も心ハいとぞ於胸にこもる。初夜の鐘。歎きの殺も萬春良雄
が心の裡を穿るせむ。却説主水ハ日頃より書籍を好むのこゆ
あらず。兵法武術ハいふもさるる。琴棋書画の巧といへば萬の藝
とゆふか。け。學ぶ物から片卿。ありといふほど。傳え語を傳えく
諸国より。武邊修行の族と云ふ。或ハ書生歌詠など。主水が門下
んと欲する者ハ尋ね來る。主水ハ是を歡び。賓のど會釈て優よ

歡待遊あつみぞ。孟嘗君が三千の客あつねども。食客客号。日々月々
に群集し。或ハ此処を辞し去り。他国へ編歷するもあり。ま。帰る本
て渴するもあり。かりに。色。バ。近国ハ。其。美名と。交。賢と。愛
して客と住む。是。近世の英雄。ありと。人々。挙て。稱へたり。か。て。多く
の客の中に。兵法修行の弱官あり。名と。劍。澤。刀。吾と。其。人。性。愚
直にて。膂力。飽。まで。強く。正。剛。氣。の。丈夫。あり。よく。槍。棒。と。は。つ。み
みるん。主水ハ。只。管。彼。と。愛。して。常。座。右。に。侍。ら。し。亦。一。人。の。書。生
あり。史記左傳。二。部。と。喚。做。ま。是。ハ。ま。よ。る。博。識。みて。智。慮。いと
深。き。者。ある。れ。二。る。た。者。よ。り。他。に。超。て。愛。する。が。此。程。知。照。の
館。から。歸。り。時。より。主水。が。動。靜。平。生。に。変。り。て。物。も。一。く。眉。を

嘸ゆ居るとして。左傳二郎ハ刀吾と招き密に密語のハクおせり。
 某此ら大人の容子と見るに何となく。嬾きはるふ在さうら。いと訝
 うしく若もま。心地や悪きと尋ねても否左におらぶとのミ回答て只
 辭々として居ゆ。そもく足下と某とが同胞のどおひ做し。いつある
 度も心と明して平生ふや語るも。斯深くも秘あハ何等の
 訳う野智とさる折とえ合せ回てえぬ若足下にやうら明しく。
 語るもつる度もあらんと。いバ刀吾も眉と嘸ゆ。某も粗猜疑よぬ。
 此裡よりして再三回どど何とも宜いど独あひよ沈まぬ。面持る
 ぞ訝しく。元より寛仁大度みて。小事よ心と勞いぬ。性よあらう後バ
 程さう怪し。吾々此処へありてより。最大惠と被ふる物うら主水ぬ。



非道と
 怒りて
 壯士
 知照へ

の喜ぶあるは假令水火社中にいとも厭つたの事と豫てより心を堅め
居ののたまはば其所謂とて語らるる。や何等の喜ぶもあき果して目頃
の思と謝せん。只官秘て口外へ出ぬを遺恨ある。足下と兩個で同はし
やと膝より寄りて左傳二郎が某とて心の裡へ足下へ変まる喜ぶるを
己と聊推量るに丸公私の喜ぶるは例も明とて語らぬ。這回強し秘め
ぬ。正しく夫等の喜ぶるあらざらば。その性賢くして人と愛し。武勇みまも
遅はしなまて千慮の外へ志路あり。此程知懸し招くまで。いともさるる。歡待に。
遭ぬぬと語らば。察するにその折なり。彼れは俗輩女房。將知懸の息女
くふ懸恋の物あり。さるに。いと吾々ハ。道とめて。父の厚き者。あ
る。且バ耻ぬ。問ども。回答らぬ。あらん。そも。ま。男子の情。る。且バ強。く。耻

と。喜ぶるも。あ。た。頼政無友の弓取るれど。菅浦の前へ。恋慕として。只。官
息の。あ。喜ぶる。氏の祖との。八幡殿と。彼宗任と。召候と。通ひ。あ。る
女房あり。義経ゆが。静の。源家累世の。良將。あ。在。せ。と。情の
道。格別。あり。その。院。筆。に。暇。あ。実の。道。と。して。る。六。戯。る。喜。と。せん。
主水。ゆ。も。年。若。く。い。ま。定。ま。る。渾。家。も。る。且。バ。耻。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。
あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。
夫。と。疑。ひ。か。つ。よ。も。心。の。着。ぬ。ひ。ぞ。現。る。蓋。世。の。智。者。あ。ら。ぬ。と。称。讃。を
ま。は。左。傳。二。郎。が。微。笑。て。し。と。然。ら。ぬ。足。下。と。俱。し。彼。れ。も。た。同。究。め。ぬ。と。小。子。合
の。中。へ。頻。と。居。る。主。水。が。備。へ。二。個。八。等。一。座。と。志。め。て。俵。も。此。程。知。懸。并。へ
往。ぬ。い。ま。平。生。の。変。と。何。や。ら。嫌。く。い。ま。せ。ぬ。バ。俸。沢。と。人。と。語。ぬ。と。

吾の心は潭の底にありて心の中を覗き見れば
に色そのまゝありて秘めたる恨みありとて主水の微笑は口をせむ
性急なる刀吾の心と堪えかねる色を吾の想その病根と推しぬり
知際が謹の奥に發むる女房をさるる知際の息女に懸恋して只管
焦るる人に疑ひのまぐさば如何なくと問ふに主水の餘りに笑ひしめ
詞とゆき刀吾の心中推量さる可笑なり口を閉ての言はざる寛かど
微笑のその貞守りて刀吾は寄吾人相とわねる人の心よく
察せり。その焦るる人とならば名をわけて在とらん吾今より知際
に至りその美女と云ふは和君よあやまらんふのくはる女子の名と
わりのや頼と宜義任の昔蒲とあらハ幡よハ宗任あり。そのま

耻を言ふのりと曩も聴聽把法又勇まて向かると餘りの言ふ左傳二節
ひと及び刀吾の袖と曳ども渠々心着て口を管主水と語り向主水ハ渠が直
実めで。其性の愚なる所謂剛氣本執をと知りのうに敢て答ふと
坐と正して左傳二節より向ひて言ふハ足下等吾とあふの餘り此程障
るる言ふの。屏と居ると鬱悒ぬ心と尽して回る今ハ何ぞ色むき
此程知際の言ふまで至りて所如此きふてまに麻九郎と喚ぶ者の會釈
這般る言は其坐を去むる討果さんと祝し藤五郎とて足麻耳て
さるハあふに物怪の僥倖なりは吾聊も財を惜みとて歎くふあふ
ども。後口黄金より暖し。毀言白骨より銷しをいへ。かゝる無頼の謔
臣が詞と容く謀役と成る。知際が愚蒙ハのふ足後と這回の言ハ吾

貯りて黄金をとりてこを果し。民に費勞はかひはなまじと此後ひつある律を
 計法入し思難きともあるは只管歎く所ありと二伍一付と物語を業に
 相違の左傳二郎。刀吾ハ是とゆると等一眼を怒らし牙を嚙み。祝し和毀之耻
 辱と與え。知察が近習麻九郎と。憎き白徒生ておろし首捨さるる
 後來を減らんと踊りて。髪ハ四方へ散乱して血を流さるる眼の光るる
 祝し百連の鏡は等一馳往んとする所を左傳二郎ハ嗟やとわらわ。ある
 在れが。あめつ。足下彼処を聞が。あバ。その罪主水ねにかる。さのさる早
 つまのりやあのと振放さんと奮震すると緊本と抱きとあかろり

十杉傳卷之九終



